



▲市の災害対策本部では、被害状況の情報収集や避難所の開設、食料の手配などが行われた

思えば、昨年の常総市洪水は、水が堤防を越流してまもなくの「決壊」が原因だった。

当時の状況をマスコミが【市災害対策本部が置かれた司令塔が水に囲まれ、一時機能不全に陥った。市役所内にいた避難住民約400人のほか、市職員や自衛隊員など計約1000人が孤立。電源設備の浸水で機器が使用不能なことから、情報のやりとりは携帯だけが頼りだった。】と報じている。

同日日、古河市役所も極度の緊張状態に置かれていた。

上流に豪雨を降らせて居座る積乱雲の動きや、利根川、渡良瀬川、思川の

水位を、職員が目凝らして24時間監視。不安を抱く市民から「問い合わせ」が殺到。電話にくぎづけだった。

市内12カ所の避難所にも職員が多数張り付いた。土嚢運びや通行止め設置も休む間がない。市役所は一睡もせずの必死の作業に追われていたのだ。

9月10日午前0時、思川がはん濫危険水位を超えた。緊張。本部の空気がピーンと張った。誰もが最悪の事態を想定。

自分を守るのは「自分」だけ

9月10日午前6時、市長名で7地区に「避難勧告」。気象庁。大雨特別警報発表。さらに水位上昇。午前11時41分、短時間で濁流が押し寄せるだろう4地区に「避難指示」を発令。(約1時間20分後、鬼怒川堤防が200m決壊。常総市の約5割が水没・冠水)

9月～10月。大型台風が連続して襲来し、群馬県や栃木県に居座らないか？増水で利根川、渡良瀬川、思川が決壊しないか？の不安がよぎる。

堤防が決壊したら「水没・冠水の悪夢」が現実になる。古河地区の約7割、総和地区の約5割が濁流にのまれるのだ(三和地区は田んぼ等、低地のみ冠水)。

古河市の「大洪水」を想像すると、居ても立つてもいられないが、市役所や消防署(団)や警察署だけで、すべてに対処するのは「きわめて困難」といわざるを得ない。

昨年の「避難勧告」「避難指示」に対し、何らかの行動をおこしてくれた古河市民は、その後の調査で「わずか1割だった」との報告がある。

「いざい」というとき、自分を守るのは自分だけだ(寝たきりや障がい者等は別。水没2m以下なら、2階以上への垂直避難が望ましい)。

どうか防災への危機意識を一人ひとりが共有し、すぐの行動をしてほしい。



古河市長
菅谷 憲一郎